ARSENE PORUGO II
アルセーヌ・ポルゴ II

夏木康志

目次

第十部　若き血潮
第１０１章　追憶の恋人 3
第１０２章　挑戦者 6
第１０３章　失われた愛 9
第１０４章　哀しみの戦士 12
第１０５章　Ｕ 15
第１０６章　地獄の坊主頭 17
第１０７章　ロジック 19
第１０８章　ミット 21
第１０９章　アーカイブ 23
第１１０章　若き血潮 25

第十一部　新たなる挑戦者
第１１１章　新たなる挑戦者 31
第１１２章　手札は切れない 34
第１１３章　究極のカード 37
第１１４章　見た事もない... 39
第１１５章　グローブは銀 41
第１１６章　練習量が全て 43
第１１７章　勝負！ 46
第１１８章　大王参戦 52
第１１９章　コンタクト 54
第１２０章　ネコ族 56

第十二部　生き残るのは誰だ？
第１２１章　生き残るのは誰だ？ 61
第１２２章　油断 66
第１２３章　賭け 69
第１２４章　最後の最後 73

第十三部　プロジェクトキマイラ
第１２５章　プロジェクトキマイラ 79
第１２６章　親友 81

第１２７章　血 83
第１２８章　もう一人のパンサー 84
第１２９章　パンサー VS パンサー 86
第１３０章　邂逅 88

第十部　若き血潮

第１０１章　追憶の恋人

東郷師範の死、それは直弟子であるアルセーヌ・ポルゴだけではなく、さまざまな人々に大きな打撃を与えていた。

生前の東郷師範を唯一君付けで呼ぶことが出来た女性、源夫人もその中の１人だ。

先代の源師範の娘である源夫人は東郷師範より一歳年長であり、修行時代の東郷師範を東郷君と呼んでいた。東郷師範の師匠である先代の源師範は東郷のことをただ名前で源一郎と呼んでいた。

若き日の東郷師範、いや東郷源一郎は本当の強さを求るために、先代の源師範、つまりり源治五郎に弟子入りした。東郷は学生時代に一度だけ、源師範に弟子入りしたい旨を直接告げたことがある。その時、源治五郎はこう答えたという。

「柔道と空手で黒帯を揃えてから、また私の門を叩きなさい。全てはそれからだ。」

東郷は４年かけて、柔道と空手で黒帯を取得した。空手は独特のサバキを用いるある流派だ。二本の黒帯と共に、彼は再び源流の門を叩いた。

「よろしい。だが、私の修行は辛いぞ。今日からあなたを一人前に育てるために、私は心を鬼にすることにしよう。」

仏のようなにこやかな面持ちの源師範の顔が、一気に本来の武道家としての顔に戻っていくのが、若き日の東郷にもよくわかった。東郷が源流に入門してからというもの、地獄のような修行の日々が数年にわたって続く。前日の厳しい修行が原因で、午後になるまで起き上がる事が出来ないということが繰り返し続いた。

鬼の武道家と仏のような紳士という二つの顔を持つ源師範であったが、私生活においては東郷に対して１人の友人として接してくれた。彼は無理な上下関係を弟子に強制するような真似はしなかった。稽古をつけてくれる時の鬼神のような源師範の表情を思い出すたびに、東郷は道場へ向う足がすくんだ。道場に赴くことは、時に激しい緊張との戦いですらあった。そんな彼の心を支えたのは、源師範の娘である源夫人だ。

若き日の東郷は、弟子である自分が師匠の娘に手を出してはいけないことをよく知っていた。それに、源師範の娘には東郷が源流に入門する以前から婚約者がいた。

東郷は源師範の道場で、来る日も来る日も修業にあけ暮れていた。一ヶ月に一度か二度、源師範の娘に道場の入り口辺りですれ違うことがあったが、東郷はただ無言で会釈することしか出来なかった。源師範の娘はただひと言「東郷君、今日も頑張ってね」と笑顔で告げると、サっとどこかに出かけてしまう。

竹刀や木刀が飛び交う激しい修行。たまに現れる源流の入門者達は、一週間もせずに道場を去っていった。若き日の東郷も何度となくこの道場から去る決意をしたことがある。

源流の道着をダストボックスに入れて処分しようとした瞬間に、かならず源師範の娘の笑顔が脳裏を過ぎり、東郷はただ無言で道場に足を運ぶ。

あのいまわしい事件が起こる以前から、源夫人は東郷にとって既に恩人と言うべき存在だ。

入門してから、わずか５年という歳月で、東郷源一郎は源流古武術の免許皆伝をいただいた。当時の東郷は環境生態学を専攻する大学院生だった。源流の免許皆伝と生態学の博士号を取得した東郷は、源師範に別れを告げると、金星フロンティアに旅立った。金星ヒョウの生態調査の研究と、武者修行の旅に出ることが目的であった。

源師範は東郷を笑顔で送り出した。それが最後の別れとなるとは知らずに。源師範の娘はいつものように笑顔で東郷に手を振っていたが、心の中では壮絶に嫌な胸騒ぎがしていた。

第１０２章　挑戦者

　道場の前に見慣れぬ若い男が立っていた。まだ少年といってもいい男だ。東郷源一郎より 10 歳以上若い。まだ 10 代半ばだろう。

「東郷さん、いますか？」

「弟子の源一郎なら、今金星フロンティアに行っておる。伝言なら、私が承ろう。」

「私は西郷詩郎という者です。このジパングで一番の使い手という東郷さんにお手合わせ願いたいと思い、ここを訪ねてきました。あなたは、きっと東郷さんの師匠の源先生ですね。」

「いかにも。今、源一郎は不在だが、そのような用件であれば、私が承ろう。」

「失礼ですが、あなたはもうご老人。つまり私と戦う資格はないように見受けられますが。」

「面白いことを言うお方だな。さあ、道場の中で一緒に勝負をしようじゃないか？」

　柔術着に袴を履いている源師範の前に、若き日の西郷詩郎が立ちふさがる。西郷は白いジャージ姿のまま、拳を目の高さまで上げて、一気に構えた。圧倒的に強烈な若いオーラだ。源師範は自然体に構えたまま、無言ですり足を使って間合いを詰める。

シュッ、シュッ。

　西郷はジャブの連発で一気に間合いを詰める。

　源師範がカウンターの右ストレートを放った瞬間、西郷は一気に身体を沈めると同時に、源師範の右腕を一本背負いの要領で摑んだ。そのまま右足で一気に相手の右足を刈り払うようにして、源師範を頭から畳に突き落とした。西郷の必殺技、一本背負い崩れの山嵐がきまった。

西郷は左の横蹴りを放つ姿勢で、ダウンした源師範を牽制すると、こう言い放った。

「あなたでは私には勝てない。もう勝負はついたはずだ。これが源流の実力か...」

　源師範は鬼の形相で立ち上がる。強烈な右のローキックで西郷を攻めるが、西郷はカウンターの右ハイで源師範の頭を刈り払った。

　再びダウンする源師範。

　倒れている源師範に背を向け、道場を去ろうとする西郷詩郎。

　源師範は最後の力を振り絞り、起き上がり様に必殺の飛燕の飛び蹴りを放った。気配だけで今の技を見切った西郷詩郎は、左腕だけで源師範渾身の飛び蹴りを摑むと、右手で源師範の胸元を摑み、頭から源師範を畳に叩き落した。ぐしゃりと骨が折れる音がした。

　この時の怪我が元で源師範は帰らぬ人となった。

「当て身投げは、源流の専売特許じゃない。今の技は、いい手応えだったな。」

こう言い残すと西郷詩郎は源師範の道場を去っていった。この時代、道場破りで人をあやめることは、ただの業務上過失致死として処理された。西郷詩郎は数年の服役期間を模範囚として過ごすと、また次の対戦相手を求めて旅に出て行った。

　東郷源一郎が源師範の死を知ったのは、彼が２年間の金星フロンティアでの学術調査を終えた後だ。源師範宅に何度となく送っていた手紙に返事が来なかった真相を師範の娘から聞くと、東郷は怒りと自分自身の無力さ加減に打ち震えた。

　既に源師範の娘はある青年実業家を婿養子として受け入れており、もう源家に東郷の戻るべき場所はなかった。

　こうして東郷は、打倒西郷詩郎の目的を果たすべく裏四十八手の研究に勤しんでいった。

第１０３章　失われた愛

誰よりも東郷を愛していた。東郷が金星ヒョウの生態に関する学会報告を行う時は必ず目立たぬ格好をして、一番後ろの席で東郷の報告を見守っていた。たとえ重要な用事で東郷の学会報告を聞き逃したとしても、その時の報告が掲載された電子ジャーナルは全て印刷してファイルに保管しておいた。

いつも自宅兼道場に毎日のように出入りする東郷源一郎。その誠実さを物語る視線と後姿の哀しい背中に心底惚れこんでいた。

東郷源一郎が生態学の博士号と源流の免許皆伝を取得した時、彼は 28 歳だった。これから研究者として華が咲く時だった。念願の金星フロンティアへの長期研究留学の切符を手にしていた。

その時、私は 29 歳だった。もはや誰が見ても適齢期で愛してはいないが、誰の目からも信頼される婚約者がいた。両親が、いや母は既に亡くなっていたが、勝手に私が生まれた時に決めた相手だった。太陽系を所狭しとビジネスに渡り歩く青年実業家だ。フィアンセは快活で、人格的に非の打ち所がなかった。しかし、私に言わせればただの眼鏡を掛けたダサい青年だ。

それに引き換え、日々父の厳しい修行の何の文句も言わず、ただひたすらに無言で武道の道に打ち込む東郷源一郎の背中のなんと逞しいことか。それに、絶滅危惧種の金星ヒョウの保護をライフワークにしたいという東郷の夢は、ただ金銭だけをひたすら追って、人としての大切な何かを完全に忘れている婚約者と決定的に違っていた。フィアンセが私のことを愛してはいないこともよく理解していた。一流企業の会長の娘である私を、ただのステータスシンボルとして求婚しているだけのことも、私は全て見抜いていた。

だからと言って、最愛の東郷を選ぶことは、当時の私には出来なかった。愛する男の夢と目標を理解していたからこそ、その人の負担となることは出来なかった。彼が既に

亡き今、その時の選択が間違いであったことはよく理解しているつもりだ。しかし、当時の私にはそれが最善の選択に見えた。

　やっと金星での研究を終え、東郷が地球圏に戻ってきた時、私は正確にただ父が西郷詩郎の拳の前に倒れたことだけを告げた。どちらが生きるか、死ぬ。そういうレベルの戦いだった。むしろ最高の敵の前で１人の武芸者として死ぬことが出来、父も本望であっただろう。

「源一郎さん、お願い、父さんの敵を討って」

　ただ、そう言えば全ては丸く収まったのだろうか？ 結果的に私は東郷に何も言わなかった。東郷はただ無言で頷いただけだった。敵を討とうにも肝心の西郷は刑務所に服役していたし、当時の東郷に必要なのは、武の道を極めることではなく、早く研究者として自立し研究成果を社会に還元することだった。源治五郎の娘としての誇りが、最愛の東郷を源一郎さんと呼ぶことを躊躇わせた。一歳年下の彼は、どこまでいっても東郷君だ。

　それに、東郷が死ぬまで黙っていた秘密だが、私は東郷と出会った時に既に源流の免許皆伝を取得していた。父は、私の娘には武道はいらぬと思います、と人前では建前を言っていた。最高の武芸者としての父が娘の才能に気付かぬはずはなかった。父は娘の婚期を気にして、私に武芸の奥義を全て伝授していたという事実を人前では隠していたが、源流最強の座は既に齢二十歳にして、この私の手中にあった。あの若き時の西郷ですら、私の敵ではなかっただろう。

　礼節を重んじる東郷は、未婚の若い娘がいる自宅兼道場となっている父の屋敷に深夜や早朝まで入り浸ることはなかった。いつも夕方陽の暮れる頃になるとひと言、失礼します、と言って、父から自宅での食事の誘いすら断っていた。

　私は門弟達が帰った後、誰もが寝静まっている早朝、まだ陽が昇らぬ内から父に稽古をつけて貰っていた。そうして門弟達が道場で練習している時間は、ただの従順な箱入り娘の役割を淡々と演じていたのだった。

　かつての婚約者、今は亡き夫とその夫との息子たちは、事業を拡大して軍需産業にまで手を出していった。そうして、自らが火星人に販売した兵器で、自ら、いや家族の命

まで根こそぎ奪われてしまった。

　こうして手元に残ったのは、病弱な孫の大海と残高の少ない預金通帳だった。父、夫、息子と三代続いた事業のおかげで、最初は生活には何の不自由はしなかった。だが、大海の病気とその高額な医療費は、私たち二人の生活を完全に圧迫していった。せめて孫の命だけは救いたい-私にはもう孫以外に血族と呼べるものはいなかった-その願いに答えてくれたのは、あの東郷源一郎だ。

　彼は、若き日に決してその思いに答えることのなかった私のために、命を投げ出して孫の命を助けてくれた。

　大手術を終えて少しずつ健康を取り戻してゆく孫の大海に、私は父直伝の源流古武術を少しずつ仕込んでゆくことにした。それがきっと、父、そして今は亡き東郷源一郎への手向けとなると知っていたから...

第１０４章　哀しみの戦士

孫の源大海（ ヒロシ ）の高額な治療費と不治の病への不安に打ちひしがれそうになった。その時、迷わず東郷源一郎に連絡した。

東郷の使いと称して紫の豹の仮面を着けて現れた若い男が東郷その人であるのは、誰よりもよくわかっていた。肩の肉付き、力強い胸元、よく締まったったボディ。全てが毎日のように道場の窓から応援していた若き日の東郷源一郎その人だ。

バスの口調にも聞き覚えがあった。彼は別の口色を使ってはいたが、懐かしい若き日の東郷その人であった。

東郷源一郎が若返りという秘術を使うにあたり支払った代償、そしてこれから支払うであろう代償の大きさを私はよく理解していた。全てを差し置いてなお、若き日の東郷に再び会えるという喜びに私の胸は高鳴っていた。若返りに成功した東郷の前にいる自分がただの老女でしかないという事実が正直悔しかった。

愛のない相手を選択するという自分への裏切りが、不治の難病に苦しむ孫の大海という存在を生み出したのかもしれない。

紫の豹として自分の前に再び現れた東郷を目にした瞬間、彼が死の覚悟を固めていることがわかった。全てに代えてでも、私からの依頼、私の孫の命を救おうとしてくれることがよくわかった。西郷詩郎を倒して、という大海の願いは、若き日の私が全てを投げ出してでも言うべき言葉だ。

あの時、西郷と戦っているパープルパンサーの中身が、既に東郷ではないことは、病院でネットヴィジョンを見ていた私が真っ先に気付いていた。若さと激闘との代償に、あの時既に東郷は健康と残された寿命の大半を使い果たしていた。

父の死、夫の死、息子の死、どんなに哀しい時でも、この地球圏にまだ東郷源一郎が生きているという事実があるだけで、私は救われていた。この一番人生で辛く哀しかったのは、東郷の亡骸を拝んだ時だ。

孫の命を救ってくれた東郷に今の私たちが何が出来るか？ ずっと考えていた。葬儀の時に、東郷の一人娘のレイナと会った。彼の妻の若い時に似て、いい娘だ。

孫の源大海は、父に挑戦をした時の西郷より幾らか若い年齢だった。大海は病弱な少年であったが、誰よりも人の心の痛みを理解していた。車椅子で病院でのベッドから離れられない不自由な生活を送ってきた結果、自由を奪われた者の哀しみをよく理解することが出来た。

人生の半分を病院の中で暮らしてきた孫の大海に、すぐに西郷詩郎やアルセーヌ・ポルゴ、それに今は亡き東郷源一郎のレベルを目指せというのは無理な話だ。

しかし、大海は父、そして私の血を引く男だ。源流の免許皆伝を持つ最後の人間である私は、残された歳月を大海に古武術を授け、人間としての自信と誇りを取り戻させることに使おうと決意した。

まさか、いきなり未成年の病弱な孫にキングオヴギャラクシーに挑戦させるようなつもりはない。まずは地方の小さな少年格闘技大会からだ。徐々に自信を付けさせれば、よい。

まだ修行時代の東郷が七夕の時短冊に「忍ぶれど...」と平兼盛の歌を綴っていたことをよく覚えている。当時の私は東郷がその歌に託した心と全く一つであった。だからこそ、かつての選択を割り切れない今の自分がここに存在しているのだ。

人の命はいつ消えるとも知れず、限りがあるという事実だけが真実だったが、人から人へと受け継がれてゆく思いがあることもまた事実だった。私がかつて東郷から受けた思い、そして返すことが出来なかった思いを全て、孫の大海に託すことにした。いずれわかりあえるときが来るかもしれない。その思いだけは、東郷から命を貰ったといって

も過言ではない孫の大海に託そうと思う。

第１０５章　Ｕ

　源夫人は健康を取り戻した孫の大海（ ヒロシ ）に古武術を仕込むと、ジパング地方の少年格闘技大会に次々とエントリーさせていった。

　源大海少年はその圧倒的な実力で、地方の小規模な少年大会であったが、それなりの実績を記録していった。遺伝的才能のお陰か、源夫人の指導のお陰か、すぐに一定の強さまでは到達することが出来た。しかし、その上に到達することが出来なかった。あと数年で、かつて源治五郎師範を倒した時の西郷詩郎の年齢に大海少年は追いつこうとしていた。

　孫が病弱だった時の記憶が抜け切らないのか、まだ大手術の後遺症が残っていることが気になるのか、あるいは唯一の肉親の可愛さがそうさせるのか、源夫人は鬼になって孫をしごく事が出来なかった。

　もちろん、源夫人は自分の寿命が尽きかけていることをよく知っていた。せめて自分が生きている間に、源流古武術の真髄と、１人で人生を生き抜くための自信を病弱だった孫に授けたい。ただその一心で源夫人は孫の大海を導こうとしていた。

「大海、もう私から直接あなたに教えられる技は尽きました。これからは私の知人のある方にしばらく稽古をつけてもらうことにましょう。私はどうやらあなたを甘やかしてしまっていたようですね。」

そう言い終えると、彼女は古い友人のトシアキ・フジワラに連絡を取った。

　トシアキ・フジワラ、彼はそのファイティングスタイルをアルファベット一文字でＵと呼ばれている伝説の使い手だった。アルファベットＵはユニバーサル・レスリング・ファイターの頭文字である。

ムエタイチャンプと最強のプロッフェショナル・レスラーの血を引く彼は、ムエタイのキックとプロレスの関節技 (サブミッション)、そしてスープレックスを使いこなす最強のレスラーだった。彼の父は、当時のグレート・アジア（ 11 世 ）にノンタイトル戦ながらスリーカウントを奪っていた。プロレス界で最も神に近い男の名を欲しいままにした天才レスラーだった。その息子であるトシアキ・フジワラはプロレス界神の申し子と呼ばれていた。

トシアキ・フジワラの必殺の関節技は彼に対する畏敬の念を持って、レスラー仲間、いやサンビストからもフジワラ・デスロックと呼ばれ恐れられていた。

トシアキ・フジワラのコーチとしての手腕を高く評価していた源夫人は孫の大海を彼に託すことにした。

第１０６章　地獄の坊主頭

　大海（ ヒロシ ）少年は単身でトシアキジムに稽古をつけて貰いに出向いた。そのジムは格闘技のジムというよりは何か城や裏稼業の事務所のような装いだ。

　大海がジムのドアをノックして中に入ると、黒尽くめのダブルのスーツにオールバック、それに黒のサングラスを掛けた若い男が出迎えてくれた。

「トシアキジムにようこそ。いまボスは二階のソファーで葉巻を吸っています。しばらくこちらで待っていていただけますか。」

　大海少年は余裕を取り戻すと、ジムの中を眺めてみた。トシアキジムは三階建てのビルの一階に位置しており、リングと筋トレマシンを完備していた。二階と三階部分は工務店であり、トシアキ・フジワラの苗字と名前から一文字ずつとったフジアキ組という工務店を彼は経営していた。

　大海を迎えた若い男はフジアキ組の組頭、いや秘書兼マネージャーだった。

　しばらく待っていると二階から坊主頭のトシアキ・フジワラが降りてきた。

「ヨぉー。ボーズ、よく来てくれたな。俺が、トシアキ・フジワラだ。お前のことはばーちゃんからよく聞いているぞ。今日から俺と一緒に修行して強くなろう！！ 基礎からきっちり関節技とキックを教えてやるぞ。」

「よ、よろしくお願いします。」

「なーにそう縮こまるな。今日からお前は俺の家族の一員だと思うことにしよう。これからは俺のことをオヤジと呼んでくれて構わない。まあ、ウチの若い衆は俺のことをボスや、マスターとかって呼ぶやつがいるけどな。呼び方はオヤジでいい。」

「はっ、ハイ。オヤジっ」

　幼少時代に戦争で父親を亡くした大海少年にとって、親父と読んでくれて構わないと言ってくれるトシアキ・フジワラの存在はあまりに魅力的で大きかった。

　トシアキ・フジワラはプロレス界神の申し子という異名だけではなく、地獄の坊主頭という異名すら持っていた。

彼と同じ格闘様式であるＵスタイルの高名な使い手には、アキラというシューティングレスラーやレジェンド・パンサーというマスクマンが存在していた。若き日のトシアキ・フジワラは実力ナンバーワン決定戦で、アキラをキックの嵐でＴＫＯに追いやり、レジェンド・パンサーをフジワラ・デスロックでレフリーストップに追い込み、Ｕスタイル最強の名を欲しいままにしていた。

　彼は齢 50 台に到達した彼は未だに現役であると同時に、名コーチでもある。格闘プロレスを目指す若手レスラーは彼の実力を慕って、団体の輪を越えて試合前のスパーリングで彼から直接稽古をつけてもらっていた。

　その鬼のように厳しい攻めと、後輩に対する妥協ない指導は彼のことを地獄の坊主頭と呼ばせて憚らなかった。

　大海少年はトシアキ・フジワラの弟子として一からキック・サブミッション・スープレックスを学びなおすことにした。

第１０７章　ロジック

　源大海はまだ中学生くらいの年齢だった。彼は人より知能は優れていたが、長年の闘病生活により己の体力に対する自信を完全に失っていた。それに、健康という財産に恵まれた同世代の少年達と比べて、彼の体格が見劣りすることを否定は出来なかった。

「ヨぉー、ヒロシ。関節技（ サブミッション ）ってのはな、お前みたいな身体の小さい人間でもヨー、梃子の原理で俺みたいなデカイヤツをサブミット（ 降参 ）させることが出来るんだ。ヨぉー、俺の技を見本に見せるからよー、真似してやってみなっ。」

　ヒロシ少年はフジワラに逆十字固めを極める。

「技のポイントがずれているんだ。梃子だよ、梃子の原理。支点、つっーのがポイントだ。支点から出来るだけ離れたところを掴んで、グィッと引っ張れば極まる。ちょっとポイントの位置をずらして見るんだ。」

　ヒロシ少年は何度か逆十字のポイントをずらして調整した。完全にツボに嵌ったらしく、トシアキ・フジワラはヒロシの身体を三回叩いてギブアップの意思表示をした。

　ポジショニングと一通りの関節技を伝授したフジワラはヒロシ少年にこう告げた。

「ヒロシ、これからは俺と一緒に百回スパーだ。サブミッションはロジックだ。合理的に身体を操り、もっとも冷静に論理を使いこなす者だけが極めることが出来る。その論理をこれからお前の身体に叩き込んでやる。俺をオヤジだと思って、かかって来い！！」

　源大海の隠された実力は、あのフジワラをして、「昔ガチンコの試合をやっていたときの興奮を思い出してしまったよ」という程のレベルだった。源大海は実戦的なスパーリングをひたすらこなすことで本来の実力に目覚め、失っていた自信を取り戻しつつあっ

た。そして、両親すら戦争で失っていた大海にとって、「俺のことをオヤジと呼んでくれて構わない」というフジワラの存在は、何にもまして代え難かった。

第１０８章　ミット

　ミットを持ったトシアキ・フジワラがヒロシ少年の前に立ちふさがっていた。好きなように構えたところを蹴って来い！ ただひと言だけ言い終えると、後は無言で坊主頭のフジワラがキックミットを構えていた。

シュッ、シュッ、シャァーラッー。

　掛け声と共にムチのようにしなるハイキックがフジワラの構えているミットに突き刺さってゆく。

　フジワラはただ受けるだけではなかった。両手にキックミットをはめたまま、ハイやミドルを駆使して反撃をしてきた。

「廻れ！ 廻るんだ！ 動きが直線的なクセを直した方が、いい！」

　彼が地獄の坊主頭と呼ばれる由縁がそこにあった。圧倒的なストィックさ。妥協無き指導。トシアキ・フジワラはただ単に超一流のファイターであるだけではなく、超一流の指導者でもあった。

「肘や膝をブチかまして来い。遠慮はいらん！！」

　鬼のように右ミドルを連発するヒロシ少年。追い込みにはいったようだ。ミットを両手にはめたフジワラの左ソバットがヒロシ少年に突き刺さった。

「連打の最中、ガードを忘れるんじゃねーぞ。わかったな。」

「ハイ、オヤジっ！」

　キック・サブミッション・スープレックス（ 打極投 ）という格闘技の３大要素を盛り込んだＵ（ ユニバーサル ）スタイルを大海少年は確実に吸収していった。

第１０９章　アーカイブ

　トシアキ・フジワラはヒロシ少年がユニバーサル・スタイルの基礎を完全に身に着けたことを確認すると、ヒロシ少年に第二回キングオヴギャラクシーのビデオアーカイブを見せた。その映像の中には、アルセーヌ・ポルゴや若返った東郷師範、それに銀河の大王や西郷詩郎といった使い手が大活躍していた。

「ヨぉー、ヒロシ。こんなかの誰と一番戦いたいか？　今度試合のチャンスを俺が作ってやろう。」

　試合という言葉を聞いた瞬間、大海少年の目が輝き始めた。自分の力を公の舞台で試したい。いつからか大海少年はそんな野望に取り付かれていた。

「それは、もちろん東郷のジイチャンがベストかな。でもジイチャンが死んじまった今は、ジイチャンのライバルの西郷六段がいいな。オヤジ、俺と西郷六段との試合を組んでくれませんか？」

「それでこそ俺が見込んだ男だ！！　いいだろう。何とか俺のネットワークを使って、西郷との試合を実現させてやる。そうだな、だいたい二ヵ月後を見ておこう。それまで、マジのガチスパーを飽きるほどやって、この勝負、絶対に勝とうじゃないか？」

　大海は目の前が一気に開けたような気がした。これがプロレス界神の申し子と呼ばれるフジワラの魅力そのものだった。ただ強いだけではなく、周りの人間の実力を最大限に引き出す。その方法をトシアキ・フジワラは知っていた。

トシアキ・フジワラは世界プロレスリング協会に電話を入れると、自分の現役復帰を条件に、西郷詩郎と自分の一番弟子である源大海との総合戦の実現を要求した。世界プロレスリング協会の会長の返事は当然のように了解の二文字であった。

「そうだな、俺の現役復帰の相手は、アキラでもレジェンド・パンサーでもいい。何だったら、ボルドーの野郎でもいいゾ！　一丁、暴れてみようじゃないか！！」

第１１０章　若き血潮

本日のメインイベントがコールされた。赤コーナーに柔術着姿の西郷詩郎が陣取っている。純白の柔術着は、上着は袖が肘まで、下穿きは丈が膝までの動き易さを配慮した極めて実戦的なものだ。もちろん腰には黒帯が巻かれている。

青コーナーから源大海が入場する。まだ 14、15 の少年だ。拳にはバンテージを巻いただけで、グローブは着用してはいなかった。キックトランクスだけを身に着けていた。対戦相手の西郷が組技（ グラップリング ）主体のスタイルであることを配慮して、大海はストライキング（ 打撃 ）主体のスタイルで勝負することに徹していた。全身にタイオイルを塗りたくり、絶対に摑まれないように準備していた。

「大海、ヤルつもりで行け！！ 後のことは全部俺が責任を持つ！！ 絶対に相手のスタイルに付き合うな。秒殺を狙って行くんだ！」

坊主頭のフジワラから強烈な指示が告げられる。セコンドアウトの指示が出た。その後、西郷と大海が向き合うと、ゴングが告げられる。

大海はムエタイベースの構えからジャブの連発で一気に間合いを詰める。コーナーまで追い込んだ大海が右ストレートを打ち込んだ瞬間、西郷は体勢を一気に入れ替えて得意の大技、一本背負い崩れの山嵐で勝負に出る。

西郷の右腕がすっぽ抜けた。

バランスを崩した西郷に背後から肘打ちをかます大海。相手を背後から掴んで膝蹴りを叩き込む。

西郷が振り向こうとした瞬間、大海はバックステップで間合いを戻した。

　呼吸が合ったその瞬間、西郷は低空タックルに行った。大海はカウンターに右膝を合わせた。その時、左右左と西郷の顔面に膝を合わせる大海。西郷は倒れなかった。大海はまたバックステップ気味に下がろうとしたが、その瞬間、得意の右肘で西郷の左瞼を切り裂いた。

　久々の流血戦だったが、百戦錬磨の西郷は冷静に対処していた。

　大海はガードを目の高さにあわせて、こう告げた。

「来い！」

　西郷は挑発に乗って、左の上段後ろ回し蹴りで間合いを詰めてきた。大海はこのスキを逃さず、背中を向けた西郷の頭を左足で刈り切った。

　完全に今の左ハイで意識を失い、倒れ込んだ西郷。

　なお、容赦なくダウンした西郷の頭を大海はカカトで踏みつけていた。意識を失い、白目を剥いた西郷は口から血を噴出していた。

　場外リングドクターがレフリーに指示を送るとＴＫＯの裁定が下された。

　そのあとフジワラがリングに上がり、大海を抱き上げた。

　全て決着がついていた。源大海はこの試合により曽祖父源治五郎をあやめた強敵、西郷詩郎を若干 14 歳で倒したことになる。この年齢は偶然、西郷が源治五郎と勝負したときの年齢と同じだった。

　和服姿の祖母の源夫人がリングサイドで見守っていた。リング上から気絶した西郷が担架で運ばれるのを大海は見守っていた。西郷に向って大海は一礼すると、リングを降りた。

　大海は祖母と握手をかわすと、師匠フジワラと共に試合会場を後にした。

　試合会場を後にした源夫人はまず東郷の眠る墓地に向かい、孫が西郷に勝利したことを告げた。心の中の東郷が笑ったように思えた。

しばらく試合が終わり殺気立っていた大海がやっと普段の表情に戻ったことを確認すると、源夫人は孫を連れて故郷の京都にある源家の菩提寺に向った。父の源治五郎、そして息子夫婦に源夫人は大海の勝利を告げた。

源流と西郷詩郎の長い戦いに終止符が打たれると共に、事実上の新時代がはじまった。

歴史はただ円環しているかに思えていたが、確かに次の時代に進むことができた。

大海は無言で曽祖父の眠る墓地の前で別れを告げると、また歩きだした。

第十一部　新たなる挑戦者

第１１１章　新たなる挑戦者

　ここは銀河帝国の版図、ネコ族の惑星ネオワールドだ。惑星ネオワールドでは異星人異種格闘技戦、通称ファイナルダウンが繰り広げられていた。

　青コーナより、ライアン・ヤマモト選手の入場です。ジパング系の顔立ちの地球人だ。髪は短髪で黒、眼も黒、肌はやや浅黒い。彫りが深い。この見慣れぬ青年の入場で、観客のネコ族の人びとはあっけにとられていた。

「モンキー族か。しかし見慣れぬ男だな。尻尾も生えてないし、毛皮もない。顔も丸顔で、三角ではない。」

「いやー、ああいう男に限って、かえってガッツがあったりして、強いもんニャー」

「そのニャーって、ネコみたいな言葉止めてくれる？ 俺たちは文明持ったネコ族で、動物のネコとは進化の次元が違うんだから。」

続きまして、赤コーナーより銀河帝国の皇太子、ギャラクティカ・ジュニア選手の入場です。皆さん、これより銀河帝国の国歌を演奏します。起立をお願いします。

　いきなりのメインイベントだ。会場総立ちのもと、銀河帝国の王子が入場して来た。

「これは王子の勝ちだな。格が違いすぎる。モンキー族と龍族だったら、全てにおいてレベルが違いすぎる・」

「いやー、あの王子はオボっちゃま育ちで、気が弱いことで有名ニャー。勝負はやってみなきゃわからないニャ。」

　勝負はKO、ギブアップの一本のみです。それでは試合を開始します。

ライアン・ヤマモトはアップライトに構えていた。全くの無名選手だった。ファイトスタイルすら不明だった。ただ、わかるのはキックトランクスを履いている事から、ストライカーだということが想像できるくらいだ。

　一方、王子はワニ顔で、鎧を着ていた。体格的には短距離選手かというスマートな出で立ちで、背中には翼が生えていた。

　無言のヤマモト。

いきなりで、トドメだよ。

　そう王子は言うと、一気に全身の気を高めて両手に集中していた。

　銀河最強の光線技、ギャラクシーウェーブ狙いだった。

　会場が光り輝き、王子のオーラに包まれた。

　全ての人びとが勝負が決まったと確信して、つぶっていた両目を開いた瞬間だ。

　目の前に、膝を抱えてダウンしている王子の姿があった。

　ヤマモトは両手を自分に向けると、こう言った。

クリーンファイトだ。スタンド勝負で行こう。はやく立ち上がってこい。

　ダウンした王子に追い打ちをせず、隙を与えるヤマモト。

　今のギャラクシーウェーブ、そしてダウンした銀河帝国の王子、そして余裕すら漂うヤマモトの表情。

くっ、いまの関節蹴りはかなり利いたな。ここは相手に甘えて時間を稼ごう。

　王子はよろよろと立ち上がると、ファイティングポーズを取った。

　そうして王子がジャブを打った瞬間、今度は王子は前のめりに倒れていた。

　ダウン、ワン、ツー、スリー、...テン、勝負はKOです。

　勝者ライアン・ヤマモト。

「わかんねー試合だな。王子なんかまずいものでも食ったんじゃないか...」

「いや、最初は膝を狙ったシャッセ・バー、次は鳩尾を狙ったシャッセ・ラテラルでKOニャ。ライアン・ヤマモト、ファインティングスタイルはたぶん空手かサバットだニャ。これだから異種格闘技観戦は止められないニャ。でも、他にもグラップリングとかも出来る可能性もあるけどニャ。まさに可能性無限大の選手ニャ。」

「シャッセ、バカ、ラテラル？ サバット？」

「シャッセは直線蹴りの事ニャ。シャッセ・バーは下段蹴り、シャッセ・ラテラルは横蹴り、サバットは地球のフランスという地方の格闘技の名前ニャ」

「ふーん、あのさるみたいな男、やるじゃないか？」

ライアン・ヤマモトは物足りない表情を浮かべつつ、会場を後にした。龍族か、スピードが遅過ぎる。コンビネーションも叩き込めず、単発KOだったか。

　会場で密かに試合を観戦していた三代目の銀河の大王は、今の試合を見てこう言った。

「ジュニアがこれほどあっさり負けてしまうとは...今の勝負を見る限り、私でも厳しいな。西郷先生でも互角と言ったところか、ボルドーでも厳しいな。ライアン・ヤマモト、一体何者なんだ？」

　こうして次回のファイナルダウンでは西郷詩郎VSライアン・ヤマモトというカードがメインで組まれることになった。ちょうど西郷は銀河帝国に武道のコーチとして滞在している最中だ。

第１１２章　手札は切れない

　しかし、西郷詩郎のグラップリング技術があれば、ライアン・ヤマモトの打撃も通用しない。皆がそう思っていた。ましてや、組技であの西郷がやぶれることはない。これも周知の事実だ。

　誰もが打撃のヤマモト、組技の西郷と思ったファイナルダウンの第二戦目、ライアン・ヤマモトはあろうことか、柔道着姿で現れた。一方の西郷は柔道着に袴の古武術スタイルだ。

　まさか組技で西郷に挑むんじゃないか？ 会場のネコ族たちがヒゲと尻尾を揺らしつつ、見つめていた。

パフォーマンスだろ。西郷相手に組技じゃ、勝ち目がない。西郷詩郎は柔道と合気柔術を極めてるんだから。あの山嵐が炸裂するぞ。

何かあるニャ。きっとヤマモトも柔道が出来るはずニャ。それも誰もみたことのない柔道ニャ。

　ゴングが鳴る。

　西郷は自然体で構え、ヤマモトも自然体で組み合うかと思えた瞬間。

　いきなり地べたに這いつくばり、匍匐前進をするヤマモト。タックルより軌道が低い。

　西郷も腰を引いて自護体になると、両膝をつき、寝技の勝負を受け入れた。

　西郷がヤマモトの帯を握り、帯取り返しにいった瞬間、空中を舞ったヤマモト。

　そのまま西郷の足に抱きつき膝十字を決めるヤマモト。

　あれはジパングの高専柔道をベースにブラジリアン柔術を取り入れているんだニャ。もしかすると、もしかするニャ...

　完全に伸びきった西郷の右膝、しかしギブアップはプライドが許さなかった。

　ヤマモトはわざを一旦解くと、スタンド勝負を要求した。

　西郷が右膝を押さえて立ち上がると、両者はスタンド勝負に出た。

「ここは当て身投げで切り返すしかない。右足がやられた以上、山嵐も使えない。」

　西郷は左のジャブを放った。

　ヤマモトは左足狙いのフェッテバーを放つと、空振りしたと見せかけ、回転して左のソバットを西郷の鳩尾に叩き込んだ。

　そのままダウンする西郷。

　ヤマモトは追い打ちに行かず、場外のレフリーにダウンカウントを要求した。

　そのままテンカウント。

　強い、その上クリーンファイトが信条。ネコ族達にもヤマモトの凄さが伝わった一戦だった。

しかしアンタの解説も凄いな。

そうかニャ。まあ、ボク、ソレイユ・シャノワールと言う名で道場やってるんで、よかったら是非入門してニャ。

しかしまだヤマモト選手は手札を切ってないニャ。サバット、高専柔道、ブラジリアン柔術。まさに立って良し、寝て良しだニャ。異種格闘技戦のファイナルダウンだからKOで

勝負がついたけど、例えばプロレスルールとかだったらどうなるニャ。ジパング人だったら、あの伝説のパープルパンサーと闘わせてみたいニャ。早速、マッチメイクしようミャン。

第１１３章　究極のカード

もしもし、ポルゴ？ ボク、シャノワールだけど...

えっと、誰でしたっけ？ 銀河帝国の方ですか？

あ、わ、も、り、ニャン。

あ、青森ですか？

ほらボク達の惑星に君が来たとき、「泡盛」を君にプレゼントしたネコ族の酋長の息子ニャン。

あのオールドソレイユさんの息子さん、ですか？

そう、我が輩はソレイユ・シャノワールである。

　回線はそのまま、オンフレンドにしておいてニャ、いま面白い映像を転送するニャ。

　ライアン・ヤマモトと銀河帝国の王子、それにポルゴ最大のライバル西郷詩郎が対戦する映像が銀河ネットヴィジョンで流れて来た。

まさか、あの西郷詩郎が敗れるなんて。それも生粋のジパング人の青年に。自分よりも若い...

興味持ってくれたかニャ？ 実はこのライアン・ヤマモトとパープルパンサーのユニバーサルレスリングルールでのプロレスの試合を組んだニャ。試合は、半年後、ここネコ族の惑星ネオワールドで。今から最新の銀河帝国行き量子移動船を手配するニャ。

やってくれるよね。アルセーヌ・ポルゴ。いや、二代目パープルパンサー。

あんた、何でも知ってやがるな...わかったよ、ただし、俺は、いやパンサーはマジで強いぜ。いいのかU系ルールで。

そこが面白い所ニャ。必殺のタイガードラゴンスープレックスを決めるところが見たいニャ。

　こうして銀河を揺るがす好カード、ライアン・ヤマモトVSパープルパンサーが組まれた。

第１１４章　見た事もない...

　見た事もない相手、聞いた事もない選手。俺はネットワークを頼りに、対戦相手のライアン・ヤマモトの対策を探した。

あっ、マリアさん。この銀河ネットヴィジョン見てくれない？

あぁ、あのアホ王子、それに西郷師範、相手は、ヤマモト先輩ね。

知り合いなのかよ。

うん、高校の二個上の先輩、今は卒業してジパング大学に通ってるらしいけど。

ファイトスタイルは？

情報料！

わかった、チョコレートケーキの美味しい店、今度奢るからさー。

交渉成立ね。

ライアン・ヤマモト。打撃はサバット（ 仏式キックボクシング ）ベース、組技は、いや寝技は高専柔道とブラジリアン柔術。たぶん投げ技は出来ない人だわ。独特の味のある格闘家よ。その前に、私のあこがれの先輩だったけど。

実はパープルパンサーとして、ヤマモト選手と闘う事になったんだ。銀河帝国で。惑星ネオワールド。

まじーっ、行ってみたいな。絶対面白そう。

あの西郷詩郎に勝った相手だ。それにパンサーの不敗神話は破りたくない。

ルールは？

U

ノックアウトかギブアップ、スリーカウントなし。判定の場合はポイント制らしい。

スープレックス一点、キャッチ一点、ダウン一点ね。チャンスも在るわね。まさか判定に持ち込もうなんて腹じゃないわよね？

もちろん、勝負はノックアウト狙いで行く。しかし、問題は相手の打撃だな。

私今高校春休みだから、一ヶ月だけ打撃を教えてあげる。ヤマモト先輩には悪いけど、チョコレートケーキの方が甘いから。でも、あたしは厳しいよ。

わかってますって。

こうして地獄の特訓がはじまった。

第１１５章　グローブは銀

　じゃあ、ポルゴ、アップはいいわね。

グローブ着けて。

俺はいつもどおりオープンフィンガーをはめようとした。

違う違う、こっちの赤いパンチンググローブ。ヤマモト先輩の打撃に対応するなら、組技や総合は忘れて、打撃の練習に専念しないと。

あれ、マリアさん、そのグローブは。

愛用のシルバーグローブ。中学まで、あたしヤマモト先輩に憧れてサバット習ってたのよ。

さ、まずはワンツーフックから。

まるでボクシングだな。

俺はマリアさんの構えるグローブにワンツーフック、アッパーを打って行った。

アッパーを打った瞬間、右膝に激痛が走った。

靴を履いたまま、マリアさんが右膝にサイドキックを放った。

サバットって靴履いたまま、蹴っていいルールなの。痛かった？　ゴメン。

わかった。じゃあ、俺も蹴るよ。靴で...

得意の右ミドルを放った。

しかしグローブで叩き落とされた。

すかさずマリアさんが左の軸足を払って来た。

今のはクッドゥピエバー。足払いみたいなものね。

　世界は広かった。ボクシングでも空手でも、ムエタイでもキックでもない格闘技、そしてさらに謎のヴェールに包まれた高専柔道まで使いこなす相手に、俺はかつてない戦慄を覚えていた。

第１１６章　練習量が全て

ライアン・ヤマモト君？

あなたは？

ソレイユ・シャノワール。今回の試合を組ませたスポンサーと言った所ニャ。今日はちょっと挨拶に来たニャ。練習見せてニャ。

練習ですか。いいですよ。

　ヤマモトはモンキー族の男と柔道着姿で練習をはじめた。まずはお互いに礼をして、組み合う...

　かに見えた瞬間、タックル気味に地面を這い出し、寝技の勝負に出ていた。ヤマモトは袈裟固めや横四方、上四方といった押さえ込みで堪えまなく相手を押さえ込んでいた。

ちょっと質問してもいいかニャ？

　下で押さえ込まれている男が参ったをして，両者は座礼をした後だった。

なんで立ち技の練習をやらないんニャ？ 投げで豪快にドカンと一本。

　僕たちは練習量が全てを決める、そんな柔道がしてみたい。たとえプロレスルールでも、寝技でレスラーに勝ってみせる。まあ、今の僕のファイトスタイルは打撃はサバット、寝技は柔道と少し...

　ブラジリアン柔術か、すえ恐ろしいジパング人ニャ。よかったら我が輩と打撃のスパーをお願いしたいニャ。寝技は正直得意じゃないけど、打撃だったらニャ。

シャノワールの肉球と鋭い目が光った。

いいでしょう。

お願いします。

　両者、グローブと靴を装備して構える。

サリュ、アレッ。

　シャノワールはジャブを打った後、靴を履いたまま左の前蹴り、その着地を利用して右の上段前蹴りを放った。

シャッセ・フロンタルか。出来るな、この相手。

　ヤマモトは器用にキックをグローブでブロックすると、今度は右のローキックを放った。

　シャノワールは左足をさっと引いてよけた。

　出来るな、このネコ族の男。

　シャノワールは引いた左足を戻し際に、左のサイドキックを放った。そのまま絶妙なバランスでサイドキックを連発するネコ戦士。

　シャッセ（ ストレートキック ）連発。ヤマモトは全てグローブでブロックすると、ステップして右ハイを放つ。

　シャノワールは今のキックを完全に左のグローブで受けた。

　両者は間合いを取ると、礼をして練習を止めた。

シャノワールさん、どこでサバットを？

昔、我が輩ネコのふりして地球に旅行した事があるニャ。その時に少し見よう見まねで覚えて、研究したニャ。

　シャノワールはグローブと靴を外すと、涼しげな顔をして後ろ足で顔をかいていた。

　ヤマモトはシャノワールの実力を認めると、こう話しだした。

打撃って、センスの要素もあるじゃないっすか？ でも寝技は努力、練習量、研究が全てっす。一度でいいからレスラーと寝技で勝負してみたいな...

あのパンサーのタイガードラゴンスープレックスは？ どうするニャ。やはり投げ技の対策も必要ニャンでは？

あの技はクラッチが特殊で、技に入る時に必ず隙が出来ます。そこを寝技で。足関とか。

面白い考えの持ち主ニャ。試合が楽しみニャ。またニャン。

　こうして黒いネコ、ではない、ネコ族の酋長の息子ソレイユ・シャノワールはライアン・ヤマモトの練習見学を終えた。

第１１７章　勝負！

息子のポルゴジュニアは生まれたばかりでまだ銀河帝国まで行くのは難しかった。妻のユメミとジュニアは地球から、銀河ネットヴィジョンで応援してくれた。マリア・ハロルドががセコンドについてくれるはずだったが、試合の直前、アタシは豹よりもヤマモト先輩を応援する！ と宣言して、ライアン・ヤマモトのセコンドを志願した。

で、結局打撃と言えば、あのジュン・バード、それに組技、U ルールということなのでジョー・ヨージ１２世が俺の、いやパンサーのセコンドを引き受けてくれる事になった。

ポルゴさん、サバットの技術を甘く見ては行けません。相手が「気」の技術を使えるかも全くわかりません。気を引き締めて行きましょう。

メキシコ流空手の使い手らしい、ジュンのアドバイスだ。

久しぶりの登場デース。あのパンサーの正体が、ポルゴさんとは驚きデース。高専柔道やブラジリアン柔術を使える相手、しかも打撃もピカ一と言ったら、もう投げでトドメをさすしかないデース。力有効利用で 200% 勝つ気で行きましょう。

ヨージらしいアドバイスだった。実際、俺はタイガードラゴンスープレックス狙いで行くしかなさそうだった。

俺は試合開始前に、レガースとオープンフィンガーを嵌め、最後に黒い豹のマスクを手に取った。俺がマスクを手に取った瞬間、マスクは気に反応して紫色に変色した。

俺の中の魂が蠢き、パープルパンサーに変身した瞬間だ。

青コーナーでライアン・ヤマモトがコールされる。マリア・ハロルドがセコンドに着いている。

一方、赤コーナーでパープルパンサーがコールされると、入場テーマの「哀しみの孤豹」とともに俺はダッシュでリングインした。セコンドはジュン・バードとジョー・ヨージ１２世だった。

これより本日のファイナルダウンメインイベント、ユニバーサルレスリングルール、15 分一本勝負を行います。決着は KO、ギブアップの一本、時間切れの場合はポイント制の判定で行います。ポイントはスープレックス、ダウン、キャッチがそれぞれ一ポイントです。それでは、両者セコンドアウト。

カン

ゴングが鳴った。リングサイドでは今回の主催者、ブラックキャットいやソレイユ・シャノワールが正面に陣取っていた。観戦者の殆どが、ネコ、いやネコ族だった。

パンサーは上段に構えると、ヤマモトは下段気味に構えた。

パンサーのロックアップ狙いを、ヤマモトは超低空タックルで切り返した。

ヤマモトの両手がパンサーの両足首に迫った瞬間、パンサーはバックステップをした。

「俺は寝技は、マダムとしかやらない主義だ。スタンド勝負を要求する！」

いかにも初代を彷彿させるパンサーのコメントだ。

ヤマモトは立ち上がると、ワンツーからの左の足払い気味のローキックを放った。

パンサーは右足を軽くあげて今のローをかわした。すかさずその右でコークスクリュー・ミドルキックを放った。

「かかったな。」

ヤマモトは今の右ミドルを左手でキャッチすると、軸の左足を体を入れて柔道の大内

刈りの要領で刈り込んで来た。

　パンサーがケンケンで今の大内刈りをかわした瞬間、パンサーは大きく弧を描いて投げ飛ばされた。

「先輩、ナイスキャプチュードっ」

　スープレックスポイントがなんと最初にパンサーではなく、ヤマモトについた。その後上になるヤマモトをパンサーは、ブリッジしてはね除けた。

　その後、牽制しつつ両者はスタンド勝負に移行した。

　速い。これは気をためてぶっ放す隙もないな。その上キャプチュードかよ。レスラーですか。

「パンサー、油断しないで。冷静に。まずはスタンドからテイクダウンを」

　ジュンの冷静なアドバイスが聞こえた。

　今度はパンサーが左ジャブから左のサイドキック、すかさずタックルに行った。

　ヤマモトはわざと今のタックルを受けて寝技に引き込んだ。下から三角絞めを狙うヤマモト。パンサーは強引にヤマモトを抱え上げると、パワーボムの体勢に入った。

　パンサーがヤマモトを抱え上げた瞬間、ヤマモトは後転の要領で高速フランケンシュタイナーを使った。一気にパンサーはマットに叩き付けられ、そのままマウントポジションを取られてしまった。

「パンサー、ブリッジしてくださーい。」

　パンサーはブリッジしてマウントをはねのけた。ヤマモトはマットで亀のように固くなってガードしていた。寝技に誘っている。

　パンサーは亀になったヤマモトのバックを取ると、一気にコーナーまで押し込んだ。

　反応してヤマモトが立ち上がった瞬間、パンサーはヤマモトの左腕をクラッチして、右腕をハーフネルソンに捉えた。

　ヤマモトは前転して、足関狙いで動いた。しかし、コーナーポストがそれを阻んだ。

　全身の気を集中してクラッチを固めたまま、必殺のタイガードラゴンスープレックスが決まった。ルール上フォールに行かず、パンサーはサイドポジションを取った。

「先輩、ポイント 1-1 です。ここは、寝技でキャッチを狙いましょう」

　マリアが叫ぶ。

　パンサーはサイドポジションからチキンウィングアームロックを狙う。左腕をパンサーが腕がらみの要領で絞り上げる。一気に折りに行った瞬間、ヤマモトは柔軟な体を利用して体を入れ替えると、今度は左の肩固めを決めて来た。

「パンサー、ここは動いて。固まったら、一気に決められマース！」

　ヨージが叫ぶ。パンサーは体を捻って、肩固めを外した。なおもフロントチョークを狙うヤマモト。パンサーはスタンド勝負を要求して、ヤマモトもこれを受け入れた。

「先輩、残り５分です。ポイントは 2-2、KO 狙いで行きましょう！」

　マリアが指示を出した。

　パンサーが左のローリングソバットを決めた瞬間、ヤマモトはカウンターの右ストレートを放った。

　両者、ダウン。

　カウント、ワン、ツー、スリー、フォー、ファイヴ。

　カウント５で両者立ち上がる。

　パンサーは右ストレートを放つと、ヤマモトも同じ右で返して来た。そのまま両者スタンドで壮絶な打ち合いを始めた。一切防御せず、お互いに殴り合う。

「これニャー、この熱い勝負が見たかったニャ。」

　シャノワール氏がつぶやいた。

　パンサーがふいに右ミドルを放った瞬間、ヤマモトは前方に倒れた。

　そのまま匍匐前進して、パンサーの両足首を捉えた。

　ヤマモトがパンサーを捉えた。パンサーは尻餅をついた。そのままパンサーがガードポジションを取るが、ヤマモトは冷静に両肘を使ってパスガードしてサイドポジションを取った。

「先輩、ナイスパス。そのまま、上から逆十字狙いましょう。」

ヤマモトがサイドからの逆十字を決めようとした。パンサーは両手をクラッチしたまま、体を入れ替える。

　なおも下からの逆十字を狙うヤマモト。

　パンサーは最後の力を振り絞って、パワーボムの体勢に捉えた。

「決まる。絶対決まる。」

　ヤマモトを目の高さまで抱え上げた瞬間、ゴングが鳴った。

　ヤマモトは軽くパンサーを叩くと、技を解除させた。

「判定の結果をお伝えします...」

　場内が騒然と鳴る中、レフリーが各ジャッチと相談の元、判定結果を伝えた。

「ポイント 3-3、ドロー」

　パンサーがあっけにとられていると、ヤマモトはすたすたとパンサーに駆け寄って、握手を求めた。パンサーは両手で応じた。

「先輩。ナイスファイトっ！」

　マリア・ハロルドがヤマモトに抱きついた。

　パンサーのセコンドの二人も、ライアン・ヤマモトとマリア・ハロルドの健闘を称えた。

「いい試合でした」

「300% 感動しました」

　こうして時間切れ引き分けと言う事で、地球圏、いや銀河を代表する二人の決着は着いた。

第１１８章　大王参戦

　ライアン・ヤマモトはクリーンファイトを信条とするファイターだった。それ打撃も寝技も出来るオールラウンダータイプだった。ここ一番の勝負では投げ技すら、使いこなせた。

　パープルパンサーと引き分けた試合は、地球圏でも銀河ネットヴィジョンを通じて放映された。

　ここ銀河帝国の首都惑星サルバトーレでも、もちろん放映されていた。

「パパ、やっぱり、ボク、ライアン・ヤマモトに修行して再挑戦するよ。」

「そうか、ジュニア。しかし、あの西郷先生ですら、破られた相手だ。」

「だからこそ、また修行して闘う意味があるんじゃないか。」

　努力を嫌っていた銀河帝国の王子が「修行」や「再挑戦」という言葉を使うようになって、どうやら息子も成長したなと安心する銀河の大王。

「ワシはまたキングオヴギャラクシーを主催する事にしよう。ジュニアよ、ワシと組むか？」

　こうして新世紀第五回キングオヴギャラクシーが銀河帝国の主催で開催される事が決まった。銀河の大王と息子のギャラクティカ・ジュニアの銀河帝国チームの他に、ライアン・ヤマモト、源大海、トシアキ・フジワラ、パープルパンサー、ジュン・バード、マリア・ハロルド、それにボルドーといった有力者の名前が巷では参加を取りざたされていた。それにまだ見ぬ強豪チームも...わかっていることはただ一つ、３代目の銀河の大王が本気になったということだ。

大王はスパーリングパートナーに西郷師範とニコラス・トルーマン、それに王子を指名すると本格的な修行に入った。銀河帝国の公務は首相に全権を委任していた。全てを賭けて挑む価値が、ライアン・ヤマモトとパープルパンサーにはある。銀河の大王は、そう確信していた。

第１１９章　コンタクト

　やっぱり強いわね。パパ。

とは言ったものの、へそくりの全てをライアン・ヤマモトに賭けていた。ドローで返金されたが、危ういところだ。

　ポルゴ夫人はやっと「ハイハイ」しだした息子を眺めつつ、こう思念していた。

　トトの倍率ではパンサーが 0.8 倍なのに対して、ヤマモトは１２倍だった。巷の予想は地球圏ではパンサーの不敗神話を支持していた。実際、不敗神話は敗れなかった。

仕方ないわね。やっぱりお小遣いは株の運用で増やさないと。

　息子がまだ手がかかる中、一瞬の隙をついてネットヴィジョンで運用を行う。本当は個人でサイバー探偵の仕事を取って儲けてみたいとの誘惑にも駆られたが、まずは夫が銀河帝国から帰って来て、ジュニアの世話も一段落してから、と自分をなだめていた。

しかし天涯孤独だと思った私もママになるなんて、世の中不思議なものね。

　ネットヴィジョンに突然、コンタクトの合図が来た。

俺だ。ポルゴだよ。ジュニア、元気かい？

元気でーす。パパ、早く帰って来てと言ってるわ。まだ、言葉は話せないけど。気持ちを通訳しておいたわ。

悪いけど、また惑星サルバトーレでギャラクシーがあるらしい。当分帰れない。

　一瞬、ポルゴ夫人の表情が怒りに震えた。

パパ、ジュニアのおむつ替えたの何回だっけ？

えっ、毎日やってたじゃん？

うそ、今月は零回よ。

いや、今回のギャラクシーで賞金出たら、ジュニアもユメミも銀河帝国旅行に招待するからさ。許してくれよ。

世の中、イクメンが重要なのよ。

わかった。わかった。

　今度のギャラクシーのトトも、またライアンに賭けてみようとポルゴ夫人は思った。

第１２０章　ネコ族

　ネコ族の惑星ネオワールドでは一族の酋長、オールドソレイユに息子のソレイユ・シャノワールが謁見していた。

「何、シャノワール、御主もキングオヴギャラクシーに参加すると申すか？」

「そうニャン。ネコ族の強さを知らしめるいいチャンスニャン。父上、泡盛貰ってもいい？」

「まあ、飲め、飲め。」

オールドソレイユにとっては、一度盃を上げ、秘伝の焼酎まで贈った友人ポルゴと息子が闘うかもしれないことが気がかりだったが、こう話した。

「シャノワールよ。我々、ネコ族には伝来、ハンターの血が流れている。ネコ族の誇りを銀河に知らしめてくれ。」

　銀河帝国最強はあの龍族じゃない。ネコ族だニャ。龍族にはないしなやかさと軽快さが、ネコ族にはあるニャ。

　開拓者の惑星ネオワールドで太陽の名を持つのがソレイユ一族だった。しかし、民主帝国主義の銀河帝国議会において、ネコ族は少数民族として、月のように差別されてきた。龍族がまるで王のように扱われているのと対照的だ。

　いつかはネコ族から銀河帝国の議長を生み、ネコ族に対する民族差別を解消し、全ての人種、民族にとって住みやすい世の中を作る。そのためにはまずネコ族が龍族より強い事を知らしめる必要がある。

かつて銀河帝国の開拓時代において、龍族と並ぶ最強の戦闘民族と呼ばれたネコ族の代表がキングオヴギャラクシーに参戦しようとしていた。

銀河を舞台にしたまさに未曾有のキングオヴギャラクシーが開催されるのは、まさに半年後だ。

第十二部　生き残るのは誰だ？

第１２１章　生き残るのは誰だ？

　ついに新世紀第五回キングオヴギャラクシーの決勝大会が開催された。予選を生き残ったチームは、パープルパンサー＆ライアン・ヤマモトのジパングチーム、銀河の大王と王子の銀河帝国チーム、西郷詩郎＆トシアキ・フジワラのマムシキラーズ、ソレイユ・シャノワールとジェラール・ボルドーのヘルストライカーズ、マリア・ハロルドと源大海のザドリームファイターズ、ジュン・バードとジョー・ヨージ１２世のゴールデンファイターズ、それに謎の新チーム二組だ。

　それでは本日より、第五回キングオヴギャラクシー決勝トーナメントを行います。赤コーナーよりヘルストライカーズの入場です！

　ロック調の入場テーマと共に、道着姿のボルドーと全身に黒い毛皮をまとったネコ、いやネコ族のシャノワールが入場した。

　続きまして青コーナーより、ゴールデンファイターズの入場です。

　オープフィンガー、タイツ、レガースをゴールドで統一したジュンとヨージが入場する。テーマ曲は、キャプチュードだ。明らかにパンサー＆ライアンのジパングチームを意識している選曲だ。

　ボルドーが先発を買って出る。一方、青コーナーの先発はジュンだ。

　ボルドーは空手スタイルで道着を着たまま勝負に挑んだ。

－俺は今まで、武士、いや格闘家としてのプライドと闘争本能を勘違いしてきた。しかし、シャノワールとの練習で、俺は生まれ変わったのだ。

　ゴングが鳴る。ジュンは鶴足立ちの構えから、テコンドーベースのサイドキックで牽制する。ボルドーは右手で今のサイドキックを撃墜すると、左ジャブから右ハイにつないだ。今の一瞬の蹴りで、ジュンの左のこめかみを擦っていた。

－やりますね。しかし、私もここで負ける訳には行きません。

　ジュンは一気に全身の気を解放した。素人にもわかる蒼いオーラが全身に纏っていた。ジュンはオーラを右足に集中すると、一瞬の見切りで飛燕の飛び蹴りを放った。

　ボルドーは左のソバットを合わせると、そのまま全身の回転を利用して右ミドルを放った。すかさず足払いでテイクダウンすると、情け容赦なくジュンを踏みつけていた。

　すかさずノータッチでジョーがリングインして、今の攻撃を妨害した。

－ジュンさーん、コーナーで休んでいてください。私が後はお任せいただきマース。

　ヨージは低空タックルからサイドを取ると、左の肩固めを狙いにいった。しかし、ここはシャノワールがストンピングで妨害した。

　２対２か。どちらか一名倒さないと、ルール上寝技で決めるのは難しい。シャノワール、ヨージ共に思念していた。

　シャノワールは尻尾を立てると、左のジャブから右のフックを放った。ヨージは右のジャブを頭を沈めて潜るように躱した。

かかったニャ。

　シャノワールはカウンターの右膝を合わせた。ヨージがダウンした瞬間、シャノワールの表情が変わった。

　滑り込み気味にダウンしたヨージに閃光魔術を放つシャノワール。そのまま尻尾をヨージの首に巻き付けると、変形のチョークスリーパーが完成した。ボルドーはリング

インして青コーナーのジュンを牽制する。

　ヨージ選手、ノックダウン。アナウンスが告げられる。二対一、不利な状況だ。ジュンは構えを解くと、両手を返して、両足に等しく体重を掛けた。一気に両者を相手に廻す作戦だ。

　まずはジュンは右の回し蹴りを放つ。ボルドーに当たった。その後、返す刀で左のソバットをシャノワールに合わせた。

ヘルストライカーズ、両者ダウン、カウントを取ります。

　カウントファイヴでヘルストライカーズは立ち上がると、ボルドーは右ハイ、シャノワールは左の水面蹴りを放った。

　この合体技で、ジュンはノックアウト負けだった。

　観客の一人が、こう言った。

－汚いな。二対一なんて。

－何か、文句あるかニャ。これがタッグマッチの勝ち方、合体技ニャン。

　続きまして本日のメインイベント、銀河帝国チーム VS マッドデーモンズの試合を行います。

　赤コーナーより、銀河の大王、王子組の入場です。皆様、銀河帝国の国歌を起立してご斉唱お願いします。「ザフロンティア」が響き渡る。

　青コーナーより、マッドデーモンズの入場です。「大悪魔の最期」という聞き慣れないパンクロック調のテーマが演奏される。白い角が生えた男がマッドデーモン一号、黒のペイントに目が３つある男がマッドデーモン２号だった。

　観客の一人がこう野次った。

「ブラックホールズのパクリだな。」

マッドデーモン一号がこう言った。

「いかにも、ブラックホールズは我が弟子だ。そして魔界最強のチーム、それが俺たちマッドデーモンズだ。覚えておけ。」

ゴングが鳴る。

　赤コーナーは王子が先発をかった。全身のオーラをためて、特大のギャラクシーウェーブを放った。マッドデーモン一号は片手、それも左手だけで、今の一撃を吸収していた。

「美味しいオーラだな。」

　マッドデーモン一号は右ストレートを王子に叩き込むと、左の前蹴りから右の前蹴りへと繋いだ。

最後の右の前蹴りで、王子はダウンしていた。

「うむ、こやつら、手だけではなく、脚にもオーラを込めることが出来るのじゃな」

　大王はリングインすると、両手を一気に引き、反動を利用して前方に放った。また光線技かと誰もが思った瞬間、そこには大王の姿もギャラクシーウェーブもなかった。

　一気に大王は瞬間移動すると、コーナーのマッドデーモン二号を吹き飛ばした。その後、やはり瞬間移動を使うと、マッドデーモン一号の前に現れ、強烈な右のアッパーを放った。

　誰もが勝負が決まったと思った瞬間、大王はダウンしており、マッドデーモン一号は無傷で立っていた。

「今のが幻遊拳か。瞬間移動とオーラを使った攻撃か。ギャラクシーウェーブをフェイン

トに使うとは、やるな。しかし、最後のアッパーは予測できた。」

　今の瞬間マッドデーモン一号はオーラの動きを読んで、アッパーを躱した瞬間、右の脚払いでテイクダウンを取ったのだった。

「王子、一対一で勝負だ。」

　銀河帝国の王子は、ダウン判定のみで、ノックダウンは免れていた。

　王子はジャブから、左の下段関節蹴りを放ち、最後に右ハイで角ごとマッドデーモン１号を吹き飛ばした。

　銀河帝国チームが二本先取して勝利を飾った。

　これで決勝トーナメントは、ヘルストライカーズと銀河帝国チームの準決勝進出が決まった。残る二枠を、ジパングチームとマムシキラーズ、ザドリームファイターズと謎の新チームが争うという構図が出来上がった。生き残るのは誰か？　それはまだ誰にもわからなかった。

第１２２章　油断

　青コーナーより、ダーククラッシャーズの入場です。見慣れない女二人組が入場してきた。一人は右手にチェーン、もう一人は竹刀を持っている。このレベルの大会に武器を持ち込むのは、最初から結果が見えていた。武器、よりも気を使った攻撃の方が隙もなく威力も高いからだった。チェーンを持っている女はダーククラッシャー一号、竹刀を持っている女はダーククラッシャー二号と名乗っていた。

続きまして赤コーナーよりジパングチームの入場です。ライアン・ヤマモトとパープルパンサーが素手で入場してきた。客席の声援も赤コーナーを支持していた。

－素手で来いよ。クリーンに行こうぜ！

ライアンが呼びかけたが、クラッシャー一号はチェーンを腕に巻き付けたラリアットで返礼した。

ゴングが鳴る。不意打ちを食らったライアンの様子がおかしい。ダウン寸前だ。

－ライアン、相手は気を具現化できるんだ。今のチェーンは気で出来ている。タッチだ。俺の方が気を制御する技術は上だ。

－食らいっぱなしで、帰れるかよ。

　ライアンはファイティングポーズをとると、スタンド勝負に出た。

　右足からのシャッセラテラル（ 横蹴り ）で間合いをつめると左のソバットを合わせたライアン。しかし、今のソバットは相手のチェーンと相打ちだった。ライアンの方が気を使えないだけ、分が悪かった。

－ライアン、タッチだ。

　ライアンは二回目のタッチを断ると、いきなりリングを這うように歩き出した。得意の低空タックルだ。ライアンはテイクダウンすると、さばいてマウントを取った。上からパウンドを放つライアン。クラッシャー一号はチェーンを使ってガードを試みた。

　しかし最後にはライアンの必死の攻撃で、気のチェーンもろともパウンドで相手をKOした。ライアンは相手を倒すと、コーナーに戻りパンサーとタッチした。

－少し油断したな。パンサー、あんたも気をつけろよ。

　パンサーは軽いステップでリングインした。一方のクラッシャー二号は竹刀を振り回していた。クラッシャー二号が正面から打ち込んだ瞬間、パンサーは竹刀を両手で挟むようにして止めた。なおも竹刀に力を込めるクラッシャー二号。パンサーは竹刀を捻ってクラッシャー二号をよろめかせると、一瞬の隙をついてバックを取った。

　あとは得意のタイガードラゴンスープレックスでKO勝ちだ。

　続きましてメインイベント、マムシキラーズ対ザドリームファイターズの入場です。

　マムシキラーズは西郷、フジワラという超いぶし銀コンビだった。一方のザドリームファイターズはマリアと大海という最年少コンビだった。マムシキラーズとザドリームファイターズはほぼ師弟関係にあり、マムシキラーズの有利が巷では囁かれていた。

　赤コーナーには西郷が立った。そして青コーナーはマリアが先発だった。ゴングが鳴る。マリア・ハロルドが激風拳を放ったが、西郷は今の気弾をサイドステップで躱した。西郷はジャブを放つと右の脚払いで踏み込んだ。そのまま一気に摑んで勝負に出た。右腕を抱え込むと、相手の右足を全力で苅り払いながら背負った。得意の一本背負い崩れの山嵐だった。マリアは今の山嵐を受けながら、下からの三角絞めを狙っていた。西郷が強引にマリアを抱え上げ、パワーボムの体勢に入ったが、しかし、なおもマリアは三角絞めを解かなかった。西郷が一気にマリアをマットに叩き付けたが、マリアの三角絞めも同時に決まり、両者KOだ。

　源大海とトシアキ・フジワラがリングインした。フジワラはこう言った。

遠慮はいらねーぞ、大海！ やる気で来い！

　大海の目つきが変わった。ムエタイベースの構えを取ると、一気にワンツーの連打から、ミドルの連打を行った。

　フジワラはスタンドで、今の打撃を受けていた。

　フジワラは最後の左ミドルを受けきると、頭突きで反撃した。

　今の頭突きは相打ちだ。

固い頭だな、大海！

　源大海が右フックからカウンター気味に左の肘を使った。フジワラの額が切れた。

　しかし、フジワラは今の肘を受けきると、首相撲から強烈な膝の応酬に出た。

　大海は今の膝をキャッチすると、キャプチュードスープレックスを高角度で放った。ダウンしたフジワラを鬼の形相で踏みつける大海、そのまま KO が宣言された。

　こうしてザドリームファイターズという伏兵チームが準決勝に進んだ。

　準決勝は、第一試合、ヘルストライカーズ対銀河帝国チーム。第二試合、ジパングチーム対ザドリームファイターズという組み合わせだ。

第１２３章　賭け

ポルゴ夫人は地球圏でネットヴィジョンを使って試合を見ていた。今回の試合はライアン、パンサー組に全財産を投資していた。

間違いない。このチームが優勝する。

誰もがそう思いたくなる魅力がジパングチームにはあった。

しかしヘルストライカーズや銀河帝国チーム、それにザドリームファイターズも侮れない実力を持っていた。トトの倍率ではザドリームファイターズが万馬券だった。

－ハイリスク、ゼロリターンの法則ね。

株の世界ではハイリスク、ハイリターンの法則が常識だったが、あまりにリスクが高いと反って収益の期待値はゼロに近づく。これが、ポルゴ夫人の経験したハイリスク、ゼロリターンの法則だ。

ネットヴィジョンでは、銀河帝国チーム対ヘルストライカーズの試合が行われていた。

先発は王子とボルドーだ。

ボルドーはゴングと同時に右のロングフックから左ミドルを放った。王子は右のフックをダッキングして躱すと、左ミドルを右手で受け止めた。王子はミドルを受け止めつつ、タックルに行った。

打撃に特化したボルドーのスタイルでは、グラウンドにはついていけない。そう予想しての行動だ。

ボルドーはタックルをけんか慣れした手つきで切ると、サイドから回り込んで、王子のバックを取った。そのまま投げっぱなしジャーマンを決めるボルドー。

大王がすかさずノータッチでリングインすると、その前に立ちふさがるシャノワール。

「大王、あんたの相手は、ボクニャー」

シャノワールはスタンド勝負を要求した。

大王は一気に両手の気を集中させ、特大のギャラクシーウェーブを放った。リングごと吹き飛ばすような、破壊力だ。

しかし、これは得意のフェイントで、ウェーブを放った瞬間、大王はシャノワールの前に立っていた。

「バレバレニャー」

そう言い放つとシャノワールは尻尾で立ち、回し蹴りを連発した。その後、一気に右のフックを放つと、左のソバットで大王を KO した。

結局、ヘルストライカーズの二本先取で試合は終わった。
続きまして本日のメインイベント、チームジパング VS ザドリームファイターズを行います。

「ジュニア、これからパパの試合よ。応援してあげて！」

パンサーとライアンが入場する。もちろん赤コーナーからだ。そしてマリアと大海が青コーナーから入場する。

先に大海がリングに立つと、対戦相手にパンサーを指名した。

「俺と勝負だ。パンサーっ！」

パンサーは無言で勝負を受け入れた。ゴングが鳴る。ロックアップから試合が始まる。しかし、大海が右のミドルで今のロックアップを外した。

そのままストンピングだ。

「パパは絶対に負けないわ！」

ポルゴ夫人が思わずトトを握りしめて叫ぶ。

パンサーは左膝をついて跪いていたが、右のショルダータックルでテイクダウンした。

そのまま立ち上がり、スタンド勝負を要求するパンサー。

大海はジャブからストレート、さらに左ミドルを放つ。

パンサーは今の左ミドルをキャッチするとそのまま腰を入れて大海を投げ飛ばした。

当て身投げだ。

マットに這っている大海のバックを取ると、パンサーは左をハーフネルソン＆右をチキンウィングにロックして、豪快に投げ放った。

タイガードラゴンスープレックスが決まった。

大海の KO が宣言され、マリアがリングインする。一方、パンサーはライアンとタッチした。

「先輩と勝負出来る日が来るとは、光栄ね」

マリアは全身のオーラを一気に限界まで高め、そのままコントロールして闘うことを選んだ。体力の消耗が激しいが、これがベストな選択だ。

下手にギャラクシーウェーブのようなエネルギー波を放つと、ロスが激しい。

ライアンはこの試合ではじめて本気を出した。

アップライトに構えると、まずは右の脚払いを二回放った。マリアは二回ともステップを使い今の脚払いを躱した。三度目に同じ技が来た瞬間、マリアの首を右ハイが捉えていた。脚払いの軌道から腰を入れてハイキックを放ったライアン。

マリアは今のハイキックを残像を使って受けていた。瞬間移動でライアンのバックを取ると、そのまま豪快なバックドロップを使いライアンを投げた。

ライアンは今のバックドロップを受けながら、ポジショニングで優位に立つよう重心をコントロールした。マリアのマウントを取るライアン。そのまま左の肩固めでマリア・ハロルドに一本勝ちした。

「さすが、パパのチームね。」

いよいよ決勝戦だ。順調にトトで勝利を飾ったポルゴ夫人は、もしパパが優勝したら、賞金とトトで銀河帝国家族一周旅行ができると密かに期待していた。

第１２４章　最後の最後

　キングオヴギャラクシー決勝、チームジパング VS ヘルストライカーズを行います。観客のネコ族たちは、一方的にヘルストライカーズを支持していた。

　ボルドーとシャノワールが入場した瞬間、会場の熱気は一気に爆発した。パンサーとライアンが入場した時、シャノワールはこう言った。

「ポルゴ、じゃなかった、パープルパンサー。もしこの試合に我が輩達が勝ったら、その時はマスクを脱いで貰おう！」

　先発はパンサーとボルドーだ。

　ゴングが鳴る。ボルドーは一気に左右のミドルでラッシュに出た後、パンチの嵐だ。パンサーは投げで切り返しを狙うが、摑む隙がない。

　ボルドーはラッシュの最後に、左の膝を狙ったシャッセバーを放った。パンサーは今の攻撃で左膝を痛めたようだ。

「負けないわ。パンサーは。そして、アルセーヌ・ポルゴは。」

　ポルゴ夫人はトトのチケットを握りしめて、思わずそう叫んでいた。

　パンサーは不屈の闘志で立ち上がると、タックルでテイクダウンしてマウントからパンチの嵐を放った。

　思わず KO が宣告されてからも、殴り続けるパンサー。

　シャノワールがリングインして、パンサーをストンピングで止めると、パンサーもライアンとタッチした。

　ライアンのストロングスタイルとシャノワールのネコ族のファイティングスピリッツが交錯する。

　シャノワールは右の脚払いと見せかけて、いきなり右ハイキックに軌道を代えて強襲した。

「燕返しか、やるな」

　ライアンはジャブを放って、間合いをコントロールした。

　今度はライアンが左のシャッセで踏み込むと、右のフェッテから左フック、右ボディと攻め込んだ。

「ライアン君、サバットかニャ。この試合はキングオヴギャラクシーにゃ。打撃だけじゃないニャ。それにネコ族の恐ろしさを君はまだ知らないニャ」

　言い終わると、シャノワールは尻尾をライアンの左足に絡めた。そのまま相手の動きを封じて右の肘をライアンの顔面にいれると、尻尾を絡めてテイクダウンした。そのままスリーパーの体勢で一気に絞め落とすシャノワール。

　パンサーがリングインしてカットに入るが、ライアンのノックアウトが宣言される。

　そのまま、パープルパンサー対ソレイユ・シャノワールの勝負が始まった。

　パンサーは左膝を痛めているようだった。一方のシャノワールは無傷。

「銀河旅行も夢のまた夢か...でも、パンサーは、いや、アルセーヌ・ポルゴは絶対に負けないんだから！」

　シャノワールは尻尾を軸足代わりに使って、旋風脚を放った。さらに左右のネコパンチ、いやフックを豪快に放った。

　パンサーは今のフックをスウェーで躱した。そのまま反動を利用してドロップキックを放った。

　今の攻撃でシャノワールはダウンした。

　パンサーは勝負と見て閃光魔術でシャノワールに蹴りかかった。シャノワールはなおも立ち上がって、スタンド勝負に出た。

　シャノワールの折れない心に会場が総立ちになって声援を行った。

　なおもパンサーは左右のミドルから、左のソバットで勝負に出る。シャノワールは尻尾を軸に使って、今のソバットにソバットを合わせた。

　シャノワールがローリングソバットで背中を向けた瞬間、パンサーはバックを取った。そのまま、ハーフネルソン＆チキンウィングに捉え、一気に投げ放った。

　タイガードラゴンスープレックスが銀河最強の技であることを証明した瞬間だ。

第十三部　プロジェクトキマイラ

第１２５章　プロジェクトキマイラ

アルセーヌ・ポルゴの遺伝子が欲しい。そう願っていたのは旧太陽系帝国のマッドサイエンティスト、ジュンコ・ホシノだった。

もともとハイスクール時代のポルゴ夫人、つまりミス・ワカマツの同級生であった彼女は、ミス・ワカマツのカレシと思われた当時のポルゴにひどい執着心を持っていた。

ジュンコ・ホシノはジパング大学の理学部生物学科を主席で卒業すると、当時の火星帝国に渡った。そこで手に入れた禁断の秘密文書がプロジェクト G' だった。

かつて旧世紀の地球圏の科学者によって行われたプロジェクト G' はゲノムやギャラクシーの頭文字である G から一歩進んで G'（ ジー・ダッシュ ）という概念を主張していた。ゲノムつまり遺伝子を操作することで、最強の強化人間 G' を生み出す。それが、プロジェクト G' だった。

プロジェクト G' で生み出された強化人間のプロトタイプである G'（ ジー・ダッシュ ）は龍族つまり銀河の大王の遺伝子を移植され、龍の気が使えるよう強化されていた。その強さはかつての旧世紀キングオヴギャラクシーの彼の５連覇の記録によって実証されている。その記録を止めたのは、かつて地球圏のサイバー探偵の草分けとされたタビト大伴（ オヤジ４０ ）だった。タビト大伴の子孫がグレート・アジア一族なので、彼の遺伝子レベルでの強さや気の実力は歴史によって保障されているといっても過言ではない。

しかし今は人類が宇宙に出て数世紀後の現代だ。

いまさらグレート・アジアや G' といった過去の人間たちではなく、新しい人間、いや新しい種が必要とされている。それがキマイラだとジュンコ・ホシノは考えていた。

何も地球人と龍族の遺伝子の混合だけではない。たとえばヒョウのスピード、ワニの装甲、人類の知能を持った種、動物と呼ばれているものと人間の融合すら可能なのではないか。

そこで必要になってくるのが、新しい種の基本となる人間の遺伝子だった。知性、肉体、気のレベルにおいてあのアルセーヌ・ポルゴに勝る人間はいない。そう確信したジュンコ・ホシノは、ポルゴ捕獲計画を密かに立てていた。

最強の人間ということであれば、真っ先に思い浮かぶのは西郷詩郎だろう。しかし彼はやや高齢であり、遺伝子の劣化の可能性がある。しかも、ホシノ博士の好みはもちろんアルセーヌ・ポルゴだ。

ポルゴ捕獲作戦にあたって、彼女はプロジェクトキマイラの試験体一号を完成させていた。イヌと火星人の遺伝子を併せ持つ、スピードタイプだった。イヌの遺伝子は組織への絶対服従の要素を反映させるよう取り込んだ。彼女の名前を火星の頭文字を取ってエムと名付けた。頭部はイヌ、体格は人間、知能は火星人という獣人だった。獣人、それはまさにプロジェクトキマイラにふさわしい種だ。

もちろん銀河帝国にはネコ族やトビウオ族といった人間たちがいた。彼らは一見獣人に見えるが、もちろん独自の自然進化を遂げた人間だった。プロジェクトキマイラでは人間の手による人工進化で、獣人を生み出そうとしていた。

「これでワタシも銀河の女王になれる。」

ジュンコ・ホシノはそう思っていた。ポルゴの遺伝子をベースに動物の遺伝子を取り込み新たなる種を生み出し、ギャラクシーに送り込む。そのキマイラがあの銀河の大王より強いことを証明すれば、世界の勢力均衡は傾き、新たな時代が訪れると確信していた。

第１２６章　親友

　ポルゴ夫人は結婚して、出産し、子供を育てる過程で、なによりも大切なものを見いだしていた。もちろん子供や夫といった家族も大切だが、家族以外で最も大切な相手と言えば古い付き合いの親友だ。子供や夫よりも、親友の方が長い付き合いである。夫も親友みたいな相手と解釈出来ないこともないが、ポルゴ夫人にとって、男と女って夫婦にはなれても、絶対親友にはなれない、ということが信条だ。

ポルゴ夫人の高校時代からの親友が、ジュンコ・ホシノだ。

一方、ジュンコ・ホシノも当時のユメミ・ワカマツを一番の親友だと思っていたが、同時に最大・最強のライバルでもあった。成績、容姿、スポーツ、あらゆる分野で内心は争っていた、いや切磋琢磨していた。もちろん初恋の相手も同じ相手だ。

　結婚したポルゴ夫人から、家族三人写った写真を受け取ったとき、遂に天涯孤独だった彼女に夫ができ、とかわいいベイビーが生まれたのねと嬉しく思った。しかしよく写真を見ると、自分の初恋の相手と一緒に家族写真に納まっている親友の姿があった。

　うーん、四捨五入するとワタシも三十路ね。いや、今は花の２０代だけど。ワタシもポルゴのことが好きと彼女に言ったことがあったわね...

　その写真からほぼ一年後、ジュンコ・ホシノは思った。

　かつての親友を裏切ることになるが、人類最強の遺伝子は、どうやらアルセーヌ・ポルゴらしい。その遺伝子を採取して、金星豹の遺伝子と混合することで、究極のキマイラ、リアル・パープル・パンサーを生み出すことが出来る。科学の進歩のために友情を裏切ることは忍びないが、しかし人類の進化を加速し、この銀河で生存競争に打ち勝つという目標があった。

ごく少数のキマイラの導入、そして地球人の進化の加速、実験の舞台としてのキングオヴギャラクシー。

まずは犬面人エムを銀河帝国の惑星ネオワールドに派遣した。周りはネコ族ばかりであったが、実際イヌ族も少数ながらネオワールドには植民していたので、目立たず行動することが出来た。ギャラクシーの試合で疲弊したポルゴを捕獲する作戦をジュンコ・ホシノ博士は実行に移したのだった。そしてその使いである犬面人エムが真価を発揮する時は、すぐそこまで迫っていた。

第１２７章　血

　犬面人エムは銀河帝国の惑星ネオワールドでポルゴに接近するチャンスを伺っていた。しかし、隙がない。嗅覚でどこにいても嗅ぎ付けることが出来たが、しかし相手の間合いに気付かれず害意を持って接近することは不可能だ。

　仕方ない。捕獲作戦はあきらめ、遺伝子だけを収集する作戦に切り替えた。

　ポルゴにエムが接近すると、わざとエムは倒れた。

「大丈夫かい？　あんた見かけない顔だね。イヌ族かい？」

　う言ってポルゴが手を差し伸べた瞬間、チクリと血液を採取した。姑息な手段だったが、これが一番確実だった。

「痛いな。なんか針でも刺さったような感じがするな。しかし、あんた大丈夫かい？」

　底抜けに甘い男だ。

「大丈夫です。すみません。私、一応イヌ族の者です。」

　言い終わると、猛ダッシュでエムは逃げていった。その先にはホシノ博士がいた。

「もうすぐ、あなたと同じキマイラが生まれるわ。」

　ホシノ博士は血液から採取したポルゴの DNA と金星ヒョウの遺伝子を組み合わせて、知能はポルゴ、戦闘力は金星ヒョウ、見かけはパープルパンサーというリアルパープルパンサーの合成に成功した。数ヶ月後には実戦投入が出来るレベルにリアルパンサーを仕上げると、過去のギャラクシーでのポルゴやライバル達の戦闘データを転送した。

第１２８章　もう一人のパンサー

　やっとポルゴは地球圏に帰ると久しぶりの息子のテツオ・ポルゴに会っていた。もうすぐ２歳になる息子はまだ紙オムツが取れないが、２足で自由に歩き、言葉を交わすレベルになっていた。

「パパっ」

「なんて呼ぶ分けねーか。いつもママ。だもんな。」

　そんなことを考えつつ、ネットヴィジョンを見ているポルゴたち。

　そのネットヴィジョンではライアン・ヤマモト VS リアル・パンサーが放送されていた。

「誰だよ。リアル・パンサーって。まるで俺のパクリじゃん」

　ゴング開始から明らかに戸惑いを見せるライアン。何かが違う。

　スピードが、本物の金星ヒョウと変わらない。気のオーラも爆発的だ。

「ライアンは気を使えないからな。これはひょっとすると...」

　リアル・パンサーはただキックボクシングのような打撃戦を展開していた。的確にガードするライアン。しかし、ダメージはガードの上から発頸で効いていた。

　ライアンはタックルで寝技に引き込もうとする。しかし、タックルをつぶしたリアルパンサーはライアンを真逆に持ち上げるとパイルドライバーで KO した。

「あ、あのライアンを KO かよ。リアル・パンサー、あいつ俺より強いんじゃねーの？」

「そんなことは絶対にないわ。パパは、いや、アルセーヌ・ポルゴは、そしてパープル・パンサーは絶対無敵よ。」

　と言いつつ、そろばんを弾いてトトでの懸賞金を計算するポルゴ夫人。

「よし、ジュニア。これから親子三人で銀河帝国に旅行に行こう。そしてキングオヴギャラクシーで誰が本当に強いのかはっきりさせよう。」

「わかったわ。あなた。でも、リアル・パンサーのセコンドの白衣の女性、なんか見覚えがあるんだけど」

「えっと、たぶん、君の親友のジュンコちゃんに感じが似てるけど、でも、他人のそら似かもな。」

　こうしてポルゴ達の初の銀河帝国親子旅行が決まった。

第１２９章　パンサーVSパンサー

銀河帝国の首都惑星サルバトーレにて、キングオヴギャラクシー特別試合、パープルパンサー対リアルパンサーの試合が行われようとしていた。

パープルパンサーのセコンドは、ライアンだ。一方、完全な獣人、キマイラのリアルパンサーのセコンドは、ジュンコ・ホシノだ。

マスクの下からでも、妻の旧友の顔が反対コーナーに陣取っているのが見えた。妻と息子は、リングサイドで観戦中だ。

ゴングが鳴る。

俺はアップライトに構えた。ジャブを打って牽制すると、相手もジャブを放つ。拳の先から感じるオーラは、なぜか俺と同じものだ。

リアルパンサーはワンツーを放った。俺は右ストレートをキャッチすると、上段の当て身投げで豪快に投げ放った。

リアルパンサーは下からの逆十字を狙ってきた。俺は逆十字を受けつつ、そのままリアルパンサーを持ち上げると、パワーボムの体勢に入った。

リアルパンサーは、パワーボムをフランケンシュタイナーで切り返した。それをまた前方回転エビ固めで切り返す俺。

妙に技の応酬が軽快に繋がっているな。俺は一旦、スタンド勝負を誘い、間合いを取った。

「夢がねーな」

　そう思った俺は、左のソバットを叩き込んだ。

　その瞬間だった。俺は左足を軸に大きく回転してリングアウトした。

　そのままプランチャで追い打ちをかけるリアルパンサー。

　ソバットを裏の当て身投げで切り返して、返す刀で飛び技だ。

「一体、何がバックグラウンドなんだ。まさか源流じゃねーよな。」

　俺はプランチャをパワースラムで切り返して、リングに戻った。

　恐ろしい速度でリングに戻るもう一人のパンサー。

　まるで、もう一人の自分と闘っている気分だ。

「ポルゴさん！　もう奥の手で勝負しましょう」

　ライアンが叫ぶ。この試合、消耗戦になったら、相手がスタミナがある分有利と、セコンドのライアンは読んでいた。

　俺は一気にボディタックルに行くと、フロントからハーフクラッチの状態で高速のスープレックスを放った。

　フロントタイガードラゴンスープレックスが決まった瞬間だ。

第１３０章　邂逅

　試合終了のゴングが鳴ると、セコンドの白衣の女性が、ダウンしているリアルパンサーに駆け寄った。コールドスプレーで首に応急処置をする彼女。

「アンタ、確かユメミの親友のジュンコ・ホシノさんだよな。」

「そうです。わかったかしら、私のもう一人のパンサーのからくりが...」

「わからねーよ。一体、なんで俺と同じ気を持った男がいるんだ。まあ、そんなことは後で聞けばいーか。俺はちょっと一休みしてくる。リングサイドにユメミとジュニアが来ている。よかったら、会ってやってくれねーか。妻に...」

「どうしても手に入らないものが、やはり世の中にはあるのね」

　俺はその後無言でリングを去った。

　リアルパンサーが担架で運ばれた後、ユメミとジュンコ博士がひさびさに対話する機会を持った。

　ジュンコ博士は、妻にこう話したという。

　世の中にはどうしても手に入らないものがある。科学力や財力、若さを持っていたとしてもだ。

「私もかつて、天涯孤独で、家族だけは手に入らないと思っていたわ。でも、こうして夫と息子に恵まれている。それにこうして親友のあなたとまた会う機会があった」

　どうしても手に入らないものが、初恋の相手、つまり親友の恋人であり今の夫とは、最後まで言い出せなかったジュンコだった。

「そうね。リアルパンサーは、私の思う最強の人間の遺伝子をベースに生み出したキマイラなの。でも、本物には勝てなかった。」

　最後の一言はジュニアが泣き出して聞き取れなかった。

「リアルパンサーの具合を見て来ないと。また会う機会があるといいわね。ユメミ。」

　そう言い終わると、ジュンコ・ホシノは会場を後にした。

アルセーヌ・ポルゴII

著　　夏木康志

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社